

異世界知識 +  $\alpha$  でこの  
世界を楽しく？ 生き抜く

当事者A

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

デマンティー・ルージユは転生者ではなかった。が、記憶だけ地球産だった。

この物語は記憶は地球産だったり、不死身になったり、自分の首をしつく狙われたりするが、頑張つて生き抜こうとする少年の物語である。

注意：：誤字脱字、シリ阿斯、作者が初心者、わかりにくさがありますが、それでもよかつたらよろしくお願いします。

# 目次

プロローグ	1
第一話 Q：転生者ですか？ A：記憶だけ地球産だけです。	6
第二話 「怪しい女神にはご注意ください」と「カゲロウの受難」	20
第三話 「オリジナル（模倣）」	31



# プロローグ

「あーあ、やらかしたなあ」

目の前で×××××  
×××××が落ちていく。

何でこうなったんだ？

「おめでどう!!君は願いを叶えたんだ!!」

俺の歩いたところには×××××が積み重なっていく。

幾つを積み重ねた？

「お俺はあ、俺はあ、どうすればあ!!」

善人が悪人になり変わる。

全て俺のせいなのか？

「やめてくれ... やめツやめてツください!!」

終わりが見えない地獄があった。

俺は、不幸だったのか？

「怖いよう。何で私だけ、こんなやつ!!」

「押すなあッ!! そのボタンはツツ!!」

「今更だろ?」

「私を壊すナア!!」

「連打ア」

「明日が来れば変わるのか

?

「お願いだ。あいつを殺してくれ」

「エンドロールは流れるもんだろ?」

「[[[[せくのツォ!!]]]]」(プオーーーーーーンドン!!

「アツハツハツハツハツハツ!!ほんとにやりやがったア!! あいつら!!」

「おめえの!! せいだろ!!!」

「全てはあなたのせいだ」

「責任の所在はお前にある」

「お前だろ?」

「お前がやったからだろ?」

「アンタのせいだ」

「お前のせいだ」

「君のせいだ」

「おめえのせいダア」

「俺の人生は何だったんだ？」

俺は間違えてしまったらしい。

それは生き方だとか、死に方だとか、物事の見方とか、色々候補はあるがとにかく間違えた。

そのせいで起きた被害は甚大で、被ったのは俺だけだがそれだけで自分の人生は終わるぐらい容易いものだった。逆に俺の範疇でよく遅待ったものだと思う。

しかし、その間違いは取り返しのつかないものであり、いわば手遅れなものだ。その事象は起こらないことはもうない。

ならば、対抗策を打とうではないか。





自動転生式発動 外部魔力の使用を許可 異空間へのアクセス権限を譲渡・継続 使用者の魔力の器を時限的にすることに設定 使用者の人格及び魂を転生体へ移動 転生体の人格及び魂を消去・失敗 妥当案として二つの魂を許容できるように構築 魔力リソースは亜空間にある魔生石で実行 構築式発動↓成功 使用者の記憶を移動

以上で使用者の自動転生式を完了とする。

．．．．．  
そして俺はそこに在った。

第一話 Q：転生者ですか？ A：記憶だけ地球産なだけです。

### 第一話

もしかしたら俺、デマンティー・ルージュは転生者なのかもしれない。

と思いはじめたのは4歳の時だった。その時から何故か異世界の記憶だけが頭にあつて、それに引つ張られたのか、俺という人格の年齢が一気に17歳に成長してしまった。記憶にあるのは地球という異世界のこと、膨大な魔法の知識。そして、膨大に膨れ上がった人間たちのことであつた。

地球にある食料や石油、それに代替するものですらなくなり、人間間での衝突、戦争、それに絶望した人間たちの末路。そんな憎しみの記憶が俺の脳にあつた。

しかし、俺は転生者ではない。残念ながら。

何故なら、転生者であつたなら異世界での記憶と、その転生者の記憶もあるはずなのだ。

俺にはそれが無いし、そもそも異世界での記憶自体に俺の記憶ではない違和感があ

る。

ならば俺は転生者ではない。この黒髪で一般的な体も俺のもので、この世界の人間な訳だ。QED!!

「そして現在7歳な訳で、悲しいかな迷子な少年だ」

「( )ど( )?」

こうなった経緯を説明しよう。

まず家にあった本を読んでいたところ、どうやら魔生石は森にも存在することが判明。ある事情で魔生石が欲しい俺はすぐに家を出て、村の近くにある森へ突入。即迷子。

という訳だ。

「我ながら考えなしだった。うん」

1人でに頷きながら森を当てもなく進んで行く。

草木が生茂るこの森は『インバの森』という。危険度は自分の感覚でいうとそこまで高く無く。魔物という体内に魔力を少なからず保有していて、普通の動物より遥かに危険度の高い生物もそこまでいない。いたとしても俺の友達の可愛い狼っぽいやつだけだ。

「いつかい呼んでみるか。おーい、カゲロウさーん。でておいでー」

『…それで出てくると思ってるデマがすごと思うよ』

「やっぱりいた」

銀と黒のモフモフな毛並みを纏った狼、カゲロウ（命名俺）が茂みから出てくる。何かこいつは人の言葉を理解できる個体らしく、口を動かさずに念話の要領で頭に直接話しかけてくる。

ちなみにこいつの名前をカゲロウにした理由はというと、某草の根ネットなんちゃらの狼な女の子からとっている。ワオーン。

「いたなら話しかけてくれよー。ぼっちは寂しいんだからさー」

『話しかけようと思ったんだけどさ、すごく話しかけづらくて』

「ん？なんで？」

『いやあ、いつものことで、毎回言ってるけど、デマってなんかすごくみんなに注目されてるんだよね』

「ああ、例の謎オーラか」

『そうそう、魔物を引きつけ引き寄せない謎オーラ』

謎オーラとは、

デマンティール・ルージュ（俺）の体を包んでいる謎のオーラであり、魔力ではなく、通常の人間が発するものではない。らしい。

魔物に実害はないらしいが、そのせいでただ気になってしまおうという、とかゲロウが言ってた。

「そういえば最近魔力量上がったけどさ、おすすめの魔法と違ってある？」

『そんな軽い勢いで魔法っていうのは習得できるものじゃないんだけどなあ…えつと、魔眼とか？』

「魔眼かあ。確かに、魔法で魔眼を作成するのはやったことないからなあ。あとかつこいいんだよなあ」

『魔眼だったら威嚇の魔眼とか、魅了とか、石化とかが有名どころかな』

「『直死!!』とか『凶れエ!!』とかしてみたいなあ」

『なにそれ?』

死が俺の前に立つんじゃないって言ってやってみたいなあ。いや、かつこいいじゃん?  
?

そんな着物姿に赤い革着を着ているし女性を頭に浮かべながら、森を歩いていると、

「ん?なんだこの建築物?」

『僕も知らないものだ。こんなところあったんだ。へエ』

そこには白い石英っぽい石できている、長方形の立方体な入り口があった。蔦や葉っぱがまとわりついていて、森の中にあっても違和感がなかった。中は下へ階段が続いており真つ暗で詳しくは見えない。

長いこの森には出入りしているが、こんなところを俺は今まで知らず、この森に住んでいるカゲロウですら知らないというのだ。

俺の中での警戒心が跳ね上がる。

「どうする？入ってみるか？」

『……誰かが結界を張った痕跡はある。ということは秘匿されていたところなのか』

「誰かが人為的に？思い当たる節はいるのか？」

『ないね。こんな森のど真ん中に作られたら一番最初に僕が気付く』

「だったら誰なんだ？」

入り口の前で一人と一匹が唸る。

この森はそこそこ広い、しかし前述したように魔物の数がそこまでいないのはカゲロウとその部下たちが目を光らせているからだ。高いレベルの魔物は追い払い、低いレベルの魔物は無害なら配下にする。それがカゲロウの活動方針であった。そして、部下に森一帯を警備させており、誰かが入ってきた場合逐一連絡が来るのだという。ということとは見落しが無いことになる。

考えているとカゲロウが決断の言葉が聞こえた。

『入ってみよう』

「理由は？」

『森を守るものとして調査しなくちゃいけない』

「ごもつともだ。確かに、俺の庭に勝手に建てられたのはちよつと勘に触るといふか、ここ俺の土地なんですが、というか」

『君の土地にした覚えはないし、庭でもないからね!』

「というこゝで、建造主を突き止めて裁判でも民事訴訟でも起こそうか」

『君は何様だい!?!』

カゲロウが俺のボケにツツコンみ先頭を歩く。続いて俺も歩いて階段に足つけるとボツボツボツボツボツ、と下へ下へ松明の火が灯る。

明かりを頼りに下へ下へ下つていく。

途中この状況と真逆なボ○口が頭によぎったが、歌わず、カゲロウの後ろを歩く。ん？どんな曲かつて？登れ進むんだよ。高い塔へ。

そんなこんなで下ること数分。やつと平らで水平な場所に出た。

「やつと広いところに出たと思ったら、今度は大きな扉が待ち構えてたとさ」

『昔話かい?』

「いや、今話だ」



『なるほど』

そんな会話を交えつつ、扉の周りをうろちよろしてみる。

壁に壁画がくなんてことはなく、ただただ石でできた壁だけがあった。

「なんか見つけたか？」

『いや？さっぱり。壁の近くに仕掛けなんて無かったし、ただ分厚いだけの開かない石扉って感じ』

「そうか……よし、最終手段だ」

俺は最終手段という名の突破方法を取るしかないと決断する。

それを聞いたカゲロウが、嬉々とした声で寄ってくる。

『お？なんかあるのかい!?!』

「ああ、あるさ。とっておきの突破方法が一つ」

『どういう突破方法だい?』

「それはなあ」俺は扉に近づき右手を棒のようにして触れる。

そして頭の中ですでに組み上げていた魔法式をラーニングして右手に魔力を流す。

すると

バアンツツ!!!

「こういうことだ」

『強行突破だよそれは!!』

扉が轟音を立て破壊され、濃い土煙が舞う。これはp m 2. 5もびつくりなほどに舞ってるわこれ。

今行ったのは魔法と呼ばれるもので、自分の魔力を起点として大気中の魔力で肉付けして現象を発生させるものであり、属性や系統が多々あるが今回は割愛。

破裂魔法というのが現在行った魔法であり、物の組織の中に魔力を強引に入れ込み、魔力を魔力を破裂させることで物を破壊するまほうである。

「ゲホツゲホツ。中〇もびつくりなほどの大気中汚さだな。オエ!!」

『正直に言っ君は正気の沙汰じゃないね。ゲホツゲホツ!!』

「これ以外にいい案があったのかカゲロウ？」

『いや無かったけども…』

「ならしようがないじゃないかあ」

『今度は誰の真似？』

「えな○かずき」

『いや誰？』と言っているカゲロウはさておき、もうそろそろ砂埃が止んできたので、前に進む。

扉の向こうは長い通路で、その向こうにもまた扉があった。

「いやまたかよ」

『今度は強行突破なしね』

「了解…いい案だと思っただけだなあ」

当然ながら扉を押しても開かず、その周りには種も仕掛けも無く、ただ石の壁と扉が広がっているだけだった。

さて、どうしようか。考えるのは得意じゃないが考えよう。唸れ俺の前頭葉。響け俺

の異世界知識。

扉をペタペタ触りながら思索していると、あることに気づいた。つーか、俺の時間を返せってなった。

「スライド式だったわ」

『いやなんでさ』

確認するの忘れてたのもあるけど、下手すぎないこれ？たまにファミレス行くときに間違えるって記憶してるけども。

がガガガ、と音を立てて開く石の扉。

俺とカゲロウが扉の先へ歩いていくとそこは、陽の光を通さないはずなのに暖かい光で包まれている緑が広がる広場と、そこで一人でお茶会をしている金髪の女性が居た。

女性はこちらに気がつく、身につけているベージュのドレスを揺らしながら近づいて喋り始めた。

「あら、誰か入ってきたなあと思つたら、面白い子が来たわねえ。うふふ」

「えーと、俺はデマンティー・ルージュです。こつちがカゲロウです」

「私はカウ。女神をやっているわ」

「…女神ですか？」

痛い人かな？とも思ったが、しかし俺とカゲロウに気づかれずに建築し、なおかつこんな、嫌な感じがする相手には信憑性があった。

女神カウは俺とカゲロウをお茶会に誘った。俺が拒否しようとするより、カゲロウが椅子に乗つかるのが速く、仕方なく俺も着席する。

カップの中には紅茶が入っており、目の前にはクッキーやスコーンなどのお菓子が皿に盛り付けられている。

クッキーを口にしてしていると、女神カウの方から話題を振ってきた。

「あなたはどこに住んでいるの？」

「えーと、この森の近くにあるメユ村ってところです」

「そう。両親は優しいかしら？」

「はい。母さんと父さんはやさしいです。たまに怖いけど」

「うふふ、あなたのために怒ってくれるんだからいいじゃない。相手にしてくれないよりはマシでしょうっ？」

「まあそうですね」

クッキーは美味しい。紅茶も美味しい。なんだこの女神、女神か？

四つ目のクッキーに手をかけそうになった時に、彼女は聞き捨てならない事を吐いた。

「あつちの世界の記憶はどう？ 馴染んでる？」

「… ツツ!!」

背中がゾゾゾつと嫌な感じがした。

身体中から冷や汗が出てきている。

目の前の正体不明から目が逸らせない。

いつ、バレた？

「目を合わせた時、あなたには異物があるのは気づいたのよ。それで喋っている間、中を見てみたらあら不思議、私の知らない世界の記憶が保存されていた。うふふ、大丈夫よ。殺したりなんてしないわ。むしろ殺させるものですか。こんな面白い見せ物、永遠

に壊さないでおきたいもの」

彼女の細い手が俺の頬を撫でるように触れる。彼女が顔を近づけると目と目が近くなり、意識が曖昧になってくる。

ヤバイ、ヤバイ、こいつは危険な生命体だ。

俺の頭の中でアラームが発しているが、魔法なのか、それとも別の力なのかは知らないが、意識が混濁してくる。

くそ、クツキーもう少し食いたかったなあ。

なんて思いながら俺は本格的に意識を手放した。

「おめでとう。あなたは永遠を手に入れました」

## 第二話 「怪しい女神にはご注意を」と「カゲロウの受難」

『おーい。起きろー』

カゲロウの声が聞こえる。背中には堅い、土？の感触。気持ちのいい冷たい風。そして胸元の上には重い物体。

「… 何でお前乗ってんの？」

『いや起こそうと思って』

カゲロウの前足・上体の方をしれつと載せているこいつは、依然として退かない様子で理由を述べた。

ちなみにこんなことは過去に多々あり、俺が寝ている時など特に載せてきやがる。重い。

「… 退こうという気持ちは？」



『無い』

全く退く気は無いらしい。何が良くて俺に乗っているんだか…：  
仕方ないので俺が何故ここに寝ているのかということについて話を始める。

『あの女神がデマに気絶の魔法を掛けて、僕にもしれつと掛けて気づいたらここに』  
「なるほど、あいつが俺に対して何か仕掛けたとかは？」

『わからない…。ことも無い』

カゲロウは何か含みのある言い方をする。

俺からしてはあの女神自体が得体の知れない存在であり、俺に何か呪い（カース）や契約（フェアトレード）などの魔法が行使されていたら、俺の身がやばい。カゲロウに何か心当たりがあるなら言って貰わないと、解呪のしようがない。

『あいつは、恥ずかしながら僕の知人の一人で』

「お前女神の知人がいるの!？」

『うん。まあ』

カゲロウの驚愕の交友関係を知って、俺は驚きを隠せなかった。

いやだってこいつの友達自体そんな知らなかったし、ましてや女神の友達なんてなりたくてなれるようなもんじゃないし、しかもあんな強者のオーラバンバン出してるやつが友達とか、尊敬するわ俺。

『彼女は面白い話とか物語とか、とにかく面白いモノが好きでね、そういう類のものに関してはあらゆる手段を使って我がものにしようとする癖があつて、それをデマに見出しちゃったぼくて』

「俺になんか施した可能性がある?」

『そう。でも見てた感じ呪い(カース)とか契約(フェアトレード)とかではなかったから、やるとしたら恩恵(グナード)だと思う』

「恩恵(グナード)か: : で、あの女神様は何を与えてくれるの?」

基本的に神は恩恵(グナード)を1種類しか与えられない。なぜなら、恩恵(グナード)はその神がなんの役目を賜っているかに影響を受けるからだ。しかし、大神や英雄になるほどの神、複数の逸話を持つている神などは例外とする。

生憎俺は神話などには疎く、カウなんていう女神は記憶にはなかつた。

『いやそれがさ、彼女はこれまで誰にも神としての役目を語ったことがなくて、いつ生まれたのかも、どんな逸話を残したかも、一切分からないんだ』

「正体不明な女神ってわけか」

そういうこと、とカゲロウが目を伏せながら答える。

逸話すら分からない女神ってますます危ないな。最後らへんの愛染○右介ぐらいやばいな。いや最後の○牙天衝の方かな？

俺はカゲロウには胸元からおさらばしてもらい、付いている土をはたき落としながら立ち上がる。そして山を刀で吹っ飛ばす姿の女神を想像しながら、空を見上げる。すると、空は夕陽に照らされていて、もうすぐ夜の帳が落ちそうだった。

「げ、もう夕暮れ時じゃんか。そろそろ帰るか」

『うん。それじゃまた今度』

「おう。また今度」

俺は森の奥に足を向けるカゲロウに背を向けて、家の方へ歩き出した。さて、夜飯は何にしようか。

僕の名前はカゲロウ。またの名をインハドゥという。

狼の姿をしているが、本当は人型をしている。

歳は10000から数えるのをやめた。

元々この世界ではないところの世界出身で、好き勝手する人間たちに愛想が尽きてこつちに来た。

そしてこつちに来て初めて会ったのが、あのカウを名乗る女神だった。

「こんにちは、異世界の侵入者さん。何をしにこちらへ？」

恐ろしい程の殺気をぶち撒けながら僕に聞く。

こいつは、ふわふわと目の前で浮いているそいつは、敵に回したらいけないやつだと本能が喚いていた。

だけど僕にもいじつてもものがある。

「自分探しの旅っていうのかな？これは。そちらこそ僕に何のようだい？」

そいつはニヤリとした笑みを作って言った。

「友達を作りに」

これが僕とカウの出会いだった。

「彼は面白い記憶の持ち主ね」

ふふふ、と微笑みながらカップを口に傾ける。

カウが魔眼でデマを気絶させた後、僕は人間態に戻りお茶会をしていた。

正直彼女がデマを気絶させた時、ぶち殺そうかと思いつたが彼女が僕の友達に手を  
出すことはありえないと思考が至り冷静になった。

僕は彼女の発言に疑問を返す。

「どういうことだい？」

「彼、この世界ではない世界の記憶が脳に定着しているのよ。記憶の移植なんて私でもやらない行為なのに、誰がやったのかしら。もしかして、貴女？」

「まさか。僕がデマが嫌がりようなことするわけないだろう？そもそも、そんなことしたら、デマが発狂して人格自体に影響が出る」

「ええ。そうね。ふふふ、ほんとに面白い子だわ!!」

ふふふ、絶えず笑う彼女。こうなつては彼女は止められない。笑い飽きるまでほっとくしかないのだ。

しかし、なぜデマにそんなことして、どのようにやったのか、そこが疑問だった。

記憶の移植なんて僕でさえできない芸当だ。しかも異世界の代物なら途方もないレベルの高さだろう。しかもそんなことをする理由がさっぱりわからない。記憶を対象に取り付けたいなら読み聞かせれば済む話だ。それをわざわざコピーではなく移植す

る意味が僕にはわからなかった。

笑い飽きたのだろう、彼女が僕に語りかける。いまだに口元は笑みが張り付いたままだが、それでも彼女の美しさが損なわれなかった。

「デマンティー・ルージュはある転生体の失敗作なのよ」

「…異世界の転生者が魔法を失敗して記憶喪失になったのがデマってこと？」

「違うわ。これ以上は言う気はないわよ」

「どう言う事だ？」

ふふふ、と笑って彼女ははぐらかす。

ああ、こいつ僕で遊んでいるな。ほんとにこいつ女神なのかな。疑うよ。

「ああ、あと彼に私の初めてをあげたわよ」

「…なに？君は下ネタ路線に変更したのかい。やめた方がいいよ。今でも痛い女みたいに見られがちなんだから」

「私、痛い女って見られてるの？地味に傷付いたわ」

なにを今更って言いそうになるがここは耐える。人で遊ぶくせして何気にこいつはメンタル面に関して豆腐以下なのだから。

閑話休題

「彼に私の初めての恩恵（グナーデ）をあげたのよ」

「へえ、それは意外だ。ずっと誰にもあげなかつたじゃないか。そこまで君は彼の事がお気に入りなんだ。それで？効果は何なんだい？」

これを聞いた後、僕は彼女を、本気で怒鳴った。

「私の恩恵（グナーデ）は××よ」

××××

「君は本気で言っているのか？」

この後は本当に感情に身を任せた。

「デマになんてことを押し付けたんだ!!!デマにツ!!デマに命の孤独の辛さを押し付け



るってのか!!それがただだけ苦しいのか君だって知ってるだろう!!」

僕はありつたけの怒りに身を任せてカウに近寄った。カウは笑顔を崩さずに、というよりさらに笑みを深め僕を見つめている。

僕はカウのベージュのドレスの胸元の部分を掴み、ふざけるなど続けた。

「デマの記憶なんてどうでもいい!!お前は命を何だと思ってるんだ!!」

「あの子はこの世界のいい戦力になると思うわ」

「そんなの知るか!!この世界の事情なんて知ったことか!!お前らいつもそうだ、生き物を自分達の道具って誤認してやがる!!」

僕は乱暴にドレスを放し、デマを肩に担ぐ。起きていないとはいえ、女の子の僕に担がれるのは些か心にくるだろうが、言わなければ問題ない。というか、彼は僕のこと女の子って認識していないんじゃないか?

その足のまま僕は出口に足を向ける。

「じゃあねカウ。僕の言葉がちゃんと理解できて反省するまでこの森を出禁とする。

あと、今後一切デマとの接触を禁ずる。いいかい？」

「ええ、いいわよ。ここに実る果実が食べれなくなるのは少し心残りではあるけれど」  
その言葉を聞いた僕は出口の扉をくぐろうとする。

「彼の事、相当気に入ってるのね」

「… ああ、デマは僕の親友だからね」

僕は早歩きで立ち去った。

「ふふ、素直じゃないだから」

かの怪しい女神は今も笑っている。

## 第三話 「オリジナル（模倣）」

### 第三話

今更なから俺ことデマンティー・ルージユはアニメ？というものの知識が多少なりともある。

例えば神の使いを人型決戦兵器で戦闘したり、物のベクトル操る敵を右手でぶん殴ったり、卍解したり、強い言葉を使うやつに弱く見えると言ってみたり、そんなアニメの知識が俺の脳にはあるわけだ。

かの異世界だったら実現は不可能だろう。神の不可侵領域を張ろうにもそんな絶対に壊れない盾なんて原理的に意味不明すぎて。科学が進歩したあの世界では再現できない。

だがしかし、この魔法が進歩した世界なら、あの摩訶不思議な現象たちを再現できるのではないか、と不詳この俺が思うのである。

そんなことを思い始めて早3年、現在8歳のデマンティー・ルージユの研究はいまだに続いていた。

「円」

いつもの森の中で、俺は自分の魔力を周りに円状に満たす。

その中では木葉の一つだろうが落ちてくる物、侵入してくる物全てを感知できる。そして俺は目を閉じ、左足を引き下げ、腰を落とし、左手で持っている木刀の柄を右手に沿わせる。

いつでも切れる。いつでも斬り殺せる。

その意思を持って、その円に入り込んでくるものを両断する準備を整える。俺の右の背筋側に木の枝がえげつない速度で飛んでくる。

「シツツ!!」

右足を前に出しその勢いを持って腰を回してその枝を真っ二つに切る。

少し右から殺到してくる3本の枝に対処するために、即座にその構えのまま両手に持ち替え右に手を脇に引いて掛け声と共に貯めていた圧縮魔力と共に突き出す。

「ストライク・エア!!」

木の枝がその圧倒的な魔力の風に負けてしまい塵となってしまふ。それはある国を統治し、円卓の騎士たちと共に戦った騎士王の技であった。いやアニメだけど。

木の枝を飛ばしていた狼、カゲロウがトコトコと俺に歩いているところを目視すると、俺も構えと警戒状態を下げる。

『いや〜いいんじゃないかな今の。円とストライク・エア、あれは前回もやったけど魔力変化効率が良くなったんじゃないかな。効果自体も満遍なく発揮してるし、後は使い手次第かな?』

「よかった〜。これでダメって言われてたらくじけてたわうん。正直俺居合の達人じゃないし、最強の聖剣なんて持ってないし無理かな〜なんて思ってたけど、やってみたらできるもんだな」

俺念能力者でもないし、最優の騎士（笑）でもないし、そもそも俺赤王派だし、半信半疑ではあったものの研究の未完成したオリジナル（模倣）の魔法。

特にストライク・エアは風魔法の風圧とベクトル操作が圧倒的に難しく、一回暴発して自分の体が上空に晒されるという事があった。あの時は「あ、死んだ」と思ったけど、

咄嗟にもう一発打ったら勢いが上手い具合に軽減され無事に着地した。生きてるってすごい。

しかし、今の俺の魔力量ではそこまでの数は打てないのが問題であった。ストライク・エア五発で空っぽになる。そんな貧弱な量しかない。カゲロウは何発撃っても空っぽにならないぐらいはある。まあ、魔物を比較対象にするのは間違っているだろうけど。

「でも魔法面はよくても、問題は剣術の方なんだよなあ」

そう、本当の問題は剣術のほうであった。

生憎村に剣術を教えてくれるところはあるのだが金がかかるし、俺の財力は雀の涙ほどだし、カゲロウは魔物だから教えられないし。うん、絶望的だ。しかし、そんな状況から救い出してくれるのがカゲロウだった。

『ああその件なんだけど、僕の友人が剣術っていうか武術に詳しい奴がいてさ、頼りになつてくれるかもしれないから解決するかも』

「まじか!?!」

よっしやー!!つと言いなから俺ははしやぎ出す。うん。いやさ。しやあないじゃん。ずつと見つからなかつたんだからさ。

『ちなみにそいつはあの女神みたいな奴じゃないから安心してね。いたつて普通な感性の持ち主だよ。戦闘以外は』

「普通のやつかー。よかつてうん? 戦闘以外は?」

『うん、戦闘以外は。あいつはさ、常に戦闘では最善を選び続けようとするんだよ。妥協なんて許さない。失敗なんて尚更。戦闘面では変態的な思考回路の持ち主なんだ』

「ああ、まあ、それぐらいなら。出会って初めてのやつに気絶の魔法ぶっこむやつじゃなきやいいや」

『その度はどうもすみませんでした...』

「ごめん。言いすぎた」

そんな感じで俺の修行がレベルアップした。

嫌な夢を見た。

「はあ、はあ、はあ、」

その夢は俺が両親を殺す夢で実際にあつたもの、だと思う。

夢の中では住んでいる家が血塗れで、まるでそこにはトマトを炸裂させた残状なのではないかと見間違うぐらいだった。

「はあ、はあ、はあ、くそ」

目覚めの悪さに悪態を吐きながらベッドから降りて、自室のドアを開けてリビングに出る。外は雨が降っているらしく、窓からは曇った景色とザアザアという雨音が聞こえた。

「…雨降ってるのか」

窓から外を見ると激しい雨が降っていて、少し向こう側の景色が見えないぐらいだつ



た。窓側に設置してあるテーブルと4脚の椅子の内窓側の椅子に座り、もたれかかるようにして天井を見上げる。

「誰が殺したんだ？」

俺には家族がいなかった。

というより、物心がつく前、俺が3歳のときに殺された。

両親は滅多刺しにされて、リビングの中央で手を繋いで血の池を作っていたらしい。この平和な村には一切起きない殺人事件で、3歳にして俺は一人ぼっちになったわけだ。

親の顔すら俺は見たこともなく、家の家事などはたまに近所のおばさんがしてくれるものの、現8歳の子供にはこの生活は辛すぎることにこの上ない。領主からの税金、おばさんが居ないときの家事、そして何より、喋り相手だった。

「家族…か…」

普通の子供が居るような家庭だったら、ありふれたどこにでもあるような環境だった

ら、なんて思ってしまう。

しかし、この世界は、というより現実には悲観すれば願いが叶うような甘いもんじやない。だからこそ俺は思考を冷静にして、表には出さず、感情を心の海の中に沈めておく。

「… 水飲んで寝よ」

そんなことを吐き出して、コップ一杯の水を煽ってから寢床についた。犯人探しは今やるべきではない。今は精一杯生きることと専念しよう。やるべきこととはつきりさせて、目蓋を閉じた。

今度こそ悪夢を見ませんように。